

## Ⅱ 小学部の研究

テーマ：「〇〇したい」を大切にした学校生活づくり

研究協力者

金沢大学人間社会研究域 学校教育系 教授 吉川 一義 氏

小学部職員

山 田 富 美

松 尾 裕 美

山 田 哲 男

高 歙 裕

竹 下 規美代

福 田 貴 子

吉 川 開

柳 生 美由季

東 田 幸 江

尾 山 登志子

## II 小学部の研究

テーマ：「〇〇したい」を大切にした学校生活づくり

1. はじめに	7
2. 実践	8
【事例Ⅰ】	
（1）児童の実態	
（2）児童のニーズを知る	
（3）ニーズをかなえるための実践の目標設定と教師の支援	
（4）経過	
（5）まとめと考察	
（6）今後の方向性	
【事例Ⅱ】	
（1）児童の実態	
（2）B君の行動や言動からニーズを読みとる	
（3）活動性を上げるための支援	
（4）まとめと考察	
（5）今後の方向性	
3. 成果と課題	19
（1）成果	
（2）課題	

## Ⅱ 小学部の研究

### 1. はじめに

子どもたちは遊びの天才である。砂遊びに興じる子、自転車で走り回る子、ドミノ倒しに集中する子、何かに見立て箱を組み立てる子、大好きなキャラクターを丁寧に描く子、どの子も毎日夢中になって遊んでいる。

しかし、私たちが学習や活動を設定する場面では、なかなかそうはいかない。興味のない学習や活動には参加しようとしなかったり、その場から逃避しようとしたりする子もいる。子どもたちが主体的に取り組む活動をどう設定するか。どのようなことに興味を持って意欲的に取り組もうとするのか。今取り組んでいることが、子どもたちの生活に本当に必要な学習なのだろうか。このような悩みを日々抱えながら子どもたちとかがわってきた。

小学部に在籍する子どもたちは年齢も低く、生活経験も未熟である。また、自分自身の要求を上手に伝えるのが苦手な子が多い。子どもたちがしたいことを存分にできるように時間を保障し、自分から動き出すのをじっと待ち、じっくりと向かい合うことで、どんなことに興味を持っているのか、どんなことに楽しみを見いだしているのか知ることができる。そこから支援が始まる。私たちは、このような姿勢で子どもたちとかがわることを研究の大前提として歩み出すことにした。

そのような中、昨年の研究会のシンポジウムの中で「ICF」が紹介された。障害を、人が「生きる」こと全体の中に位置づけて、「生きることの困難」として理解するという、根本的に新しい見方に立っている。また、対象者をマイナス面ではなくプラス面に目を向け、健全な面にアプローチしていこうとするものであった。ICFの理念を理解し、実践に活かそうとしたことは、次のように整理できる。

- 子どもの生活全体を総合的に把握しようとする
- プラス面を重視し、プラス面を引き出し、伸ばそうとする
- 本人が自分への自信を深め、生活の満足感を高めようとする

このように ICFの理念は、自分たちが研究の前提として大切にしてきたことと重なる。また、生涯にわたる支援の連続性、他機関との連携という今日的な課題にアプローチすることへの新しい枠組みとなりうるのではないかと思われる。

以上のような経緯を踏まえ、今年度は研究のテーマを下記のように設定した。

子どもたちの「〇〇したい」を大切にしたい学校生活づくり

ICFの理念を学び、ICFモデルを適応し、子どもが主体的に学校生活を送ることを願い、そのための支援のあり方を探る事例研究を試みることにした。

また、事例対象の抽出にあたっては、「簡単な会話」ができる「Aくん」と「Bくん」を選んだ。「Aくん」は、第4学年の男子であり、日頃からしたいことがたくさんあり、教師にしたいことを伝え、協力を求めることができる。また、したいことも自分のイメージがはっきりとしており、自己主張が強く、教師の提案を受け入れることが難しい。「Bくん」は、今年度地域の小学校から転校してきた第6学年の男子で、会話ができるが、自分のしたいことや興味のあることを、はっきりと主張しない子である。この対照的な2人を抽出し、ICFモデルを実践の枠組みとして適用を試み、実践をすすめた。

## 2. 実践

### 【事例Ⅰ】児童の主体性を大切にしたい遊びの展開

#### ～Aくんのピタゴラ装置づくりを通して～

#### (1) 児童の実態

本児は自閉症の診断を受けている、4年生の男子児童である。目新しいものにはすぐ関心を持ち、一番にしたがることが多い。好きな遊びには時間を忘れて熱心に取り組めるが、気分がむらがあり、短期間で興味のブームが過ぎ去ってしまう。文字は単語のかたまりとして読よめるものもあるが、1文字ずつ読めないでコンプレックスを持ち、国語や算数などの教科学習を苦手としている。また、普段の学校生活でも音楽や集会などの集団学習は自分の好きな活動でないと活動場所の小ホールの端でおもちゃで遊んでいたりするが、友だちの活動している様子は気にして見ているなど集団を意識している。友人関係では好きなY児となら遊べるが、それ以外の他児が遊びの中に入ろうとすると排除することもある。

#### (2) 児童のニーズを知る

6月にICF整理シートをもとにAくんのニーズについて検討してみた。Aくんは好きなことには熱中しやすいタイプで、様々なことで「自分の思ったように作ったり、遊んだりしたい」という願望が強いようであった。特にピタゴラ装置のDVDに興味を持ってよく観ていて、教師に「ピタゴラやりたい」と伝えていた。そこで、ピタゴラ装置作りの活動が学校生活の中で人・もの・状況とのかかわりや参加を促進するのではないかと考え、取り組みをすることにした。(資料1 ICF整理シート①参照)

#### (3) ニーズをかなえるための実践の目標設定と教師の支援

Aくんの「ピタゴラやりたい」というニーズをかなえるためにピタゴラ装置づくりの活動を設定した。そこでAくんがおおいに楽しみながら取り組めるための目標設定および教師の支援を以下のように考えた。

目標①「より高度なピタゴラ装置作りができる」

＜教師の支援＞

- ・「ピタゴラ装置 DVD BOOK」(NHK出版)のDVDを視聴したり、「ピタゴラ装置」のホームページ(HP)を検索したりする時間や場所の提供
- ・ピタゴラ装置作りの時間や場所の保障
- ・完成したピタゴラ装置をビデオ撮影する際のビデオカメラや撮影の協力
- ・ビデオ撮りした作品を視聴する時間の設定
- ・ピタゴラ装置を作るために本児が「こんなものがあれば……」と言ってきた場合の材料の提供

目標②「ピタゴラ装置作りにおいて他者に自分のイメージを伝える力をつける」

＜教師の支援＞

- ・HPの動画を一緒に観ることでイメージを共有化する
- ・材料の提供の際、具体物やDVDの本の写真を示し、言語化して伝える

#### (4) 経過

3月頃に学校で購入した「ピタゴラ装置 DVD BOOKⅡ」が気に入って、テレビの画像

と本の写真を見比べながら楽しむようになった。

春休み中に、家庭でDVDⅡの本を購入し、新学期から学校に持って来るようになり、しばらくしてDVDⅠの本も購入。学校ではパソコンの動画サイトのピタゴラスイッチを「お気に入り」に登録してもらって、繰り返し観ていた。

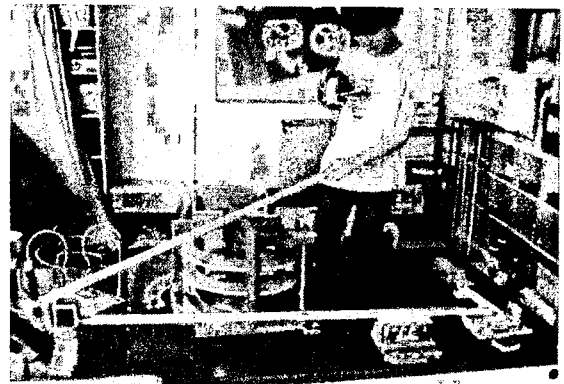
### ①ピタゴラ装置を作り始める

4月中旬より、自分でもピタゴラ装置を作り始める。「ピタゴラスイッチ」と教師に紙に書くよう頼み、それを装置のゴール地点に置く。玉が転がって落ちるという簡単な仕組みをいくつか作るうちに「ビデオに撮りたい!」と要望し、ビデオ撮影が始まった。そして撮ったビデオをすぐ再生し、繰り返し観て楽しんでいた。観ている時に「これ(装置名)は何?」と教師が聞くと、文字を読むことが苦手なAくんが「レンゲ3」等とDVDの本の中の名前で答えていた。

熱中しだすと授業時間にかかわらず、1時間以上、給食時間でも作り続け、ピタゴラ装置が完成したら、「先生ビデオ!」と呼びに来た。そして、「DVDで観たい!」とDVDの本のような物ができないかと、願望を持つようになった。このころは、登校するとまず2階のパソコンでピタゴラ装置の動画を観て、ある程度満足すると1階に下りてきて小学部ホールでピタゴラ装置作りを始めていた。

### ②ピタゴラ装置作りの変化

5月の連休過ぎに、Aくんのピタゴラ装置を楽しむ様子をDVDにして、Aくんに観せると、とても気に入って何度も観ていた。また、ランランタイム(小学部の集会)でも皆の前で発表すると得意気な顔をしていて、さらに装置作りへの意欲が増したようであった。ピタゴラ装置作りは、一つの装置を作るまでには時間や試行錯誤を要したが、それを続けることで、ピタゴラ装置のバリエーション(材料、大きさ、空間 etc)は増えてきた。簡単な装置から傾斜角度を変える、材料を組み合わせることなどでだんだん複雑な装置へと変化し、スタートからゴールまでの時間がのびてきた。Aくんの頭の中のイメージ通りに装置が完成するまでに幾度となく失敗することは多いが、投げ出さず、粘り強く取り組む姿が見られた。時には代替え案を考えることもあった。初めは教師が撮影していたがそのうちAくんの方から「ここから撮って」と撮る角度を指定してきた。そのうち自分でビデオの撮影をしたがり、自作自演で作ったものをビデオで撮ることもできた。



自分で作ったピタゴラ装置を撮影するAくん

### ③自己認識の変化

装置を作る時間が保障されていることで、余裕がでてきて、自分で時間を調整しながら、普段の授業にも参加しようとする姿も見られてきた。

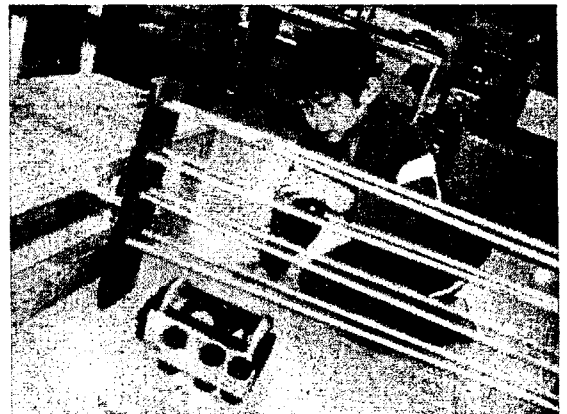
ピタゴラ装置の予備知識となるDVDの本、HPなどの視聴を通してひらがな・カタカナ・漢字・数字・アルファベットなど類推しながらではあるが、読める言葉も増えてきた。また、教師にビデオ撮影を頼む際、「おねがいします」など丁寧な言葉で言ってきたり、「こんな物が欲しい」と材料の提供を求める時も具体的な言葉で言えたりする場面も見られるようになってきた。(資料2 ICF整理シート②参照)

#### ④友だちとのかかわりでの変化

友だちとのかかわりでは、作っている時に活動のじゃまをしないと認識でき、近くにいてもよい友だちが増えた。(Yくん、Fくん、Rくん)そしてその友だちとは休み時間などでキャスターカー遊びや追いかっこ遊びを楽しめるようになり、遊びも広がった。また、仲の良い友だちのYくんであればピタゴラ装置を作ることを認め、完成するまで励ます姿も見られた。Yくんには紙に「ピタゴラスイッチと書いて」と頼むこともあった。

#### ⑤他児への影響

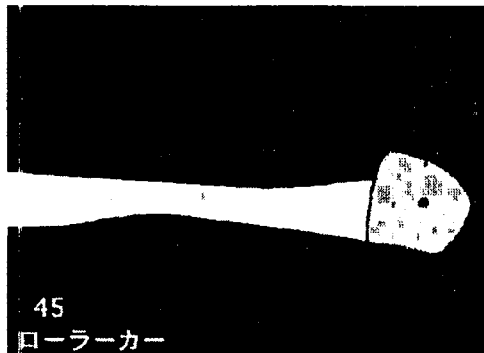
他の児童への影響としては、ピタゴラ装置作りに関心を持つ児童(Mさん、Nさん、Oくん、Uくん)が増えてきた。特にYくんはピタゴラ装置作りにも熱心に取り組み、完成するとAくんのようにビデオ撮影を求め、何度もビデオを観て楽しんでいた。また、Kくんは、ピタゴラ装置をイメージしてパソコンのお絵かきソフトでイラストを描いていた。



Aくんの様子を見てピタゴラ装置を作るYくん



11月下旬にYくんとともにドミノ倒しを作っていたAくん



Kくんのイラスト

#### ⑥ピタゴラ装置から次への展開

ピタゴラ装置作りは7月上旬あたりまで続いた。

夏休み明けから関心は「くみくみスロープ」「ドミノ倒し」「レゴブロック」へと移行していった。

## (5) まとめと考察

「より高度なピタゴラ装置作りができる」という目標をたて、実践を行ってきた。Aくんは予備知識（ピタゴラ装置 DVDBOOK、HP、ビデオカメラの操作 etc）を活用し、装置を作り、作った装置をビデオで撮り、すぐ観ることを繰り返すうちに、より自分のイメージした装置が作れるようになってきた。ようやく完成したものをビデオに撮って、友だちや教師に見せることでほめられたり、DVD にして様々な人(集会、学習発表会、体験入学の児童や保護者など)の前で発表できたりしたことは、Aくんにとっておおいに自信となった。

「ピタゴラ装置作りにおいて他者に自分のイメージを伝える力をつける」という目標では、教師がビデオ撮影にじっくりつきあったことでAくんが「こんなものがあれば～」と言ってきた時に作りたい装置のイメージがわかり、装置の材料を提供しやすくなった。

ピタゴラ装置づくりを通して、予備知識（ピタゴラ装置 DVDBOOK、HP、ビデオカメラの操作 etc）を得て、試行錯誤を繰り返し、失敗したり成功したりしながらも徐々に活動性が高まってきた。そして実際に行動・活動することを通して自分がイメージしたピタゴラ装置が作れるようになったことで自己効力感が高まった。

あきらめずに何度も作りなおして微調整しながらようやく完成し「やった！やればできるんだ。」という自信。文字が書けなくとも書きたいことを教師に代わりに書いてもらって「自分ができなくても先生に頼めばいいんだ」という自己認識の修正。前よりも複雑な装置ができたことで「他のピタゴラにもチャレンジしてみよう」という意欲。Aくんの変容から自己認識の更新・拡大へと進んだことが考察される。

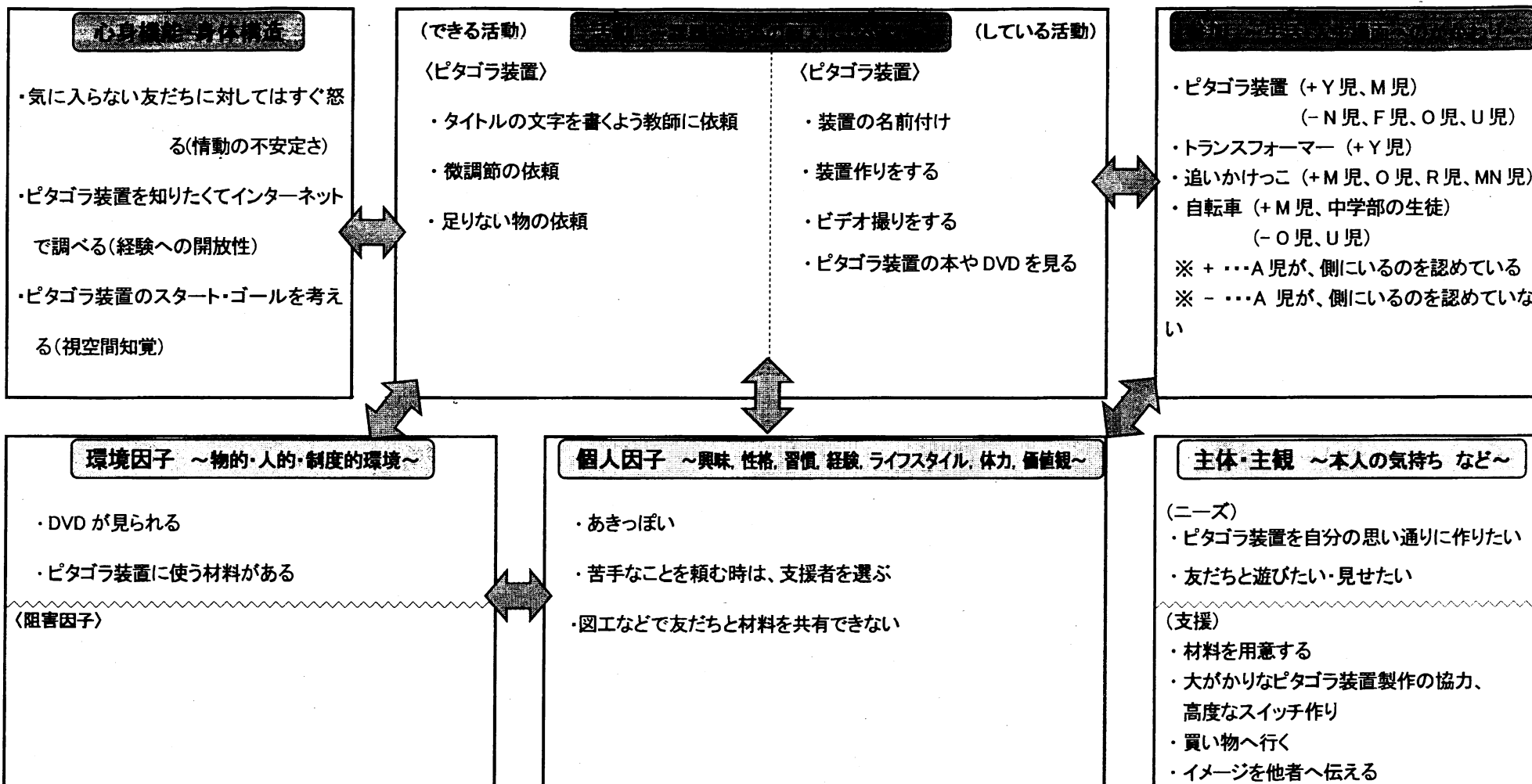
また、教師や友だちとのかかわりが広がったことは、「自分の作ったピタゴラ装置を友だちに見てほしい」という気持ちだけでなく、Yくんの作るものを認め励ます姿や、相手の気持ちになって「Yくんはこれが作りたいんだね」と自分のイメージと相手のイメージとのすりあわせをしていたこと<sup>うかが</sup>から窺える。

更に様々な人に観てほしいというAくんの思いは、ピタゴラ装置 DVD の発表の場を設けたことなど(環境因子)で、表現する世界が広がり、社会への参加も高まったと考えられる。

## (6) 今後の方向性

自分でつくったピタゴラ装置を撮影して楽しめるようになったことで、新たな活動として、2学期後半より映画作りにも取り組むようになった。折り紙で作ったサメと人形を手で動かして動画を撮ったり、レゴブロックの人形を少しずつ動かしてデジタルカメラで撮りながら映画にしたりとAくんなりのストーリーのある作品ができた。これに満足し、家でもデジタルカメラを使って映画作りをするようにもなり、さらに自信がついたようである。また、映画作りはAくんの内面の思いを知る機会ともなった。

今後もAくんの興味・関心、願望は広がっていくと思われる。これからも「自分の思ったように作ったり、遊んだりしたい」といった彼の主体性を大切にしながら「やってみたい！」と思う題材と一緒に探し、Aくんと一緒に楽しみながらかかわっていききたい。



資料1 ICF整理シート①(6月)



### 心身機能・身体構造

- ・ピタゴラ装置を作るためにどんな材料を使えばいいか考えることができる(高次認知機能)
- ・装置作りの時は集中してできる(注意の維持)
- ・手と目の協調ができ、微細な装置の傾斜を作ることができる(精神運動機能)
- ・ピタゴラ装置などを調べるためインターネットの操作技術がアップ(高次認知機能)

### (できる活動)

- ・ピタゴラ装置の微調整をする
- ・材料の足りないものを教師に依頼する
- ・ピタゴラ装置の材料(木材)を切る
- ・ホームページのインターネットの動画を観るために、教師に依頼して「お気に入り」に登録してもらう

### (している活動)

- ・本の中からピタゴラ装置の名前を選ぶ
- ・「ピタゴラスイッチ」と書くように教師やYくんにお願いする
- ・作ったピタゴラ装置のビデオ撮り
- ・ピタゴラ装置DVDBOOKの本の写真とDVDをみる
- ・インターネットの「お気に入り」に登録したピタゴラ装置の動画サイトを観る(くみくみスロープ、ドミノなども)

### 参加 → 生活・人生場面へのかかわり～

- ・自分のピタゴラ装置DVDを集会でみんなに紹介すると照れ笑いしていた
- ・Yくんのピタゴラ装置作りを応援したり、Yくんのビデオ撮りの中で歌ったりする
- ・体験入学に来た子どもや保護者にDVDを見せた
- ・自分の得意な「くみくみスロープ」を作って見せる

### 環境因子 ～物的・人的・制度的環境～

- ・ビデオ撮影がすぐできるよう準備した
- ・できたDVDをランランタイムでみんなに見せた
- ・家で自分の時間を楽しむようになった

### 個人因子 ～興味、性格、習慣、経験、ライフスタイル、体力、価値観～

- ・自分の作ったピタゴラ装置をDVDで見たい
- ・ピタゴラ装置をビデオカメラで撮ってほしい
- ・「ピタゴラスイッチ」の文字を教師やYくんに書いてほしい
- ・DVDを人に見せたい

### 主体・主観 ～本人の気持ち など～

#### <ニーズ>

- ・自分の思うとおりにピタゴラ装置を作りたい  
→ビデオ撮りしてDVDにしたい  
→DVDBOOKにもしたい
- ・映画を作りたい(サメと人形、レゴブロック)

客観的次元

主観的次元

### 主観的体験

### 予備知識

- ・ホームページの動画サイト  
(ピタゴラスイッチ、くみくみスロープ、ドミノ倒し)
- ・ピタゴラ装置DVDBOOK、
- ・ビデオカメラの操作

### 自己認識

- ・イメージした装置を作ることができた
- ・本の中から自分の作った装置に名前をつける
- ・自分でビデオ撮りをする
- ・自分で書けない文字を教師やYくんに頼めば書いてもらえる
- ・装置作りで傾斜・角度・距離のとり方を経験から知る
- ・何度も失敗しても投げ出さずに成功する
- ・ビデオ撮りの時、言葉使いが丁寧になる「おねがいます」
- ・10月で「これは終わったんだよ」と言う(ピタゴラ終了)  
→くみくみスロープ、ドミノ、レゴブロック

「自分でもピタゴラ装置が作れるんだ」  
「自分でもビデオが撮れるんだ」  
ピタゴラスイッチからイメージがふくらんできて、  
映画作りへ

【事例Ⅱ】主体的に行動し、自己認識が変わることをめざした取り組み

～Bくんの「～してもいいの？」に応じて～

(1) 児童の実態

今年度本校に転入した6年生男子。前籍校では特別支援学級に在籍していたが、5年生の時に親学級の児童との関係がうまくとれなくなり不登校気味になる。自閉症との診断を受けている。

〈検査結果〉 WISC-Ⅲ (2008年2月実施) VIQ:58 PIQ:55 FIQ:52 (CA:11.0)	
転入当初の行動の様子 <ul style="list-style-type: none"> <li>・話し声が小さい</li> <li>・「疲れた」「休みたい」「行かない」「しない」と言って授業に参加せず、教室でパソコンをしたり本を読んだり、中庭をうろうろしたりする</li> <li>・同じクラスのHの行動が気になりその子についてまわる</li> <li>・4月に撮影したHの写真(笑顔)を指摘し、「いつも笑わんよ。なんでや。」と教師に何度も聞いたり、その顔写真を爪でひっかいてしまう</li> <li>・「一緒に遊ぼう」と他の子に話しかけ、かかわりを持とうとするがなかなか遊べない</li> </ul>	という不活発な様子が見られた
少し慣れてきた頃には <ul style="list-style-type: none"> <li>・塀をよじ登って裏の竹藪に入っていく、何でも投げ入れる</li> <li>・教室に押しピンをまく</li> <li>・体育館の2階から、下にいる人に向かって大きなボールを投げる</li> </ul>	という行動をとるようになってきた

(2) Bくんの行動や言動からニーズを読みとる

このような様子から窺われる<sup>うかが</sup>“新しい環境に対する不安やとまどい”を“安心感”に変えていくことを最優先に考えた。Bくんが言葉で伝えた、したいことは、「パラオに行きたい。」ということであった。図書館で借りてきた本に、パラオは夏休みが3ヶ月あると書いてあったことが彼の心に残っていたのであろう。そこで、彼の実態把握のために、私たち一人一人が把握するBくんの姿をICF整理シート(図-I)に書き入れることにした。ICFモデルに従って生活の状況を広く見渡していくことで、本人の言動や行動の原因や背景との関係が見えてきた。友だちのことが気になる、知りたい。自分のペースで行動したい。という要求が言動や行動に表れているのではないかと推測された。そこで、質問や要求にはできるだけ丁寧に応えること。「休みたい」「しない」などの言葉をできるだけ受け入れることを教師間で共通理解し、Bくんとかかわることにした。

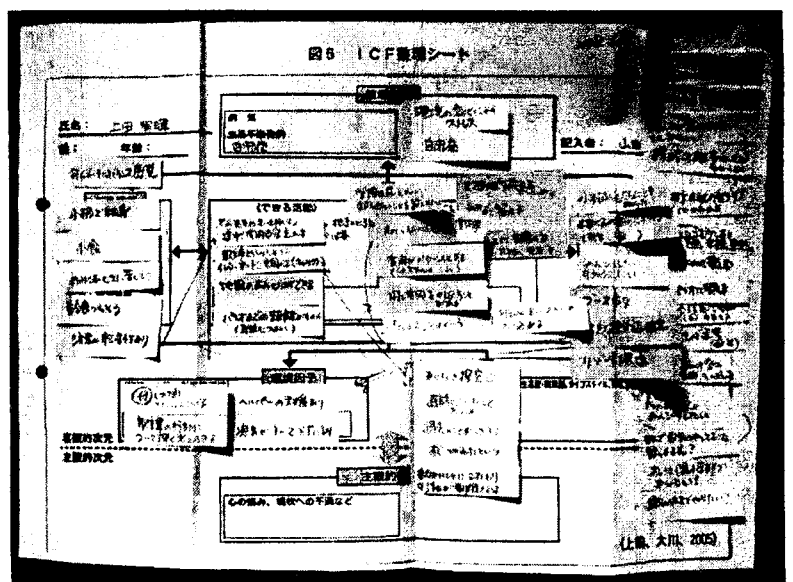


図-I ICF整理シート1

しかし、このときはBくんのニーズを読みとるまでにはいたらなかった。活動性が少しでも上がることを願い、彼の発した『パラオにいきたい』というキーワードからインターネットや地図、地球儀での学習を試みたが、活動性は依然として上がらなかった。簡単な会話ができる子であっても、要求をうまく伝えることができるとは限らないということを実感した。

### (3) 活動性を上げるための支援

学校生活に少し慣れたことで安心感が芽生えてきたのか、自分でしたいことを見つけて過ごす姿が見られるようになった。そこで、『活動性が上がるもの』にポイントをしばってもう一度実態を整理することにした。この頃のBくんは、中庭で一人で虫やトカゲを探すことに夢中になっていた。また、調理活動には興味を示し部分的に参加することもあった。『活動性が上がるもの(Bくんにある健全な能力や個性を発揮しやすい活動)』という点では虫探しの方がよかったかもしれないが、人とかかわりを生み出すことができるということ、作ったものを食べる時にとてもよい表情をするということから、調理活動にポイントを絞り、ICF 整理シートに書き入れ、Bくんの様子を見ることにした。(資料3参照)そして、『人とかかわりながら主体的に活動する』という目標を立てて実践した。

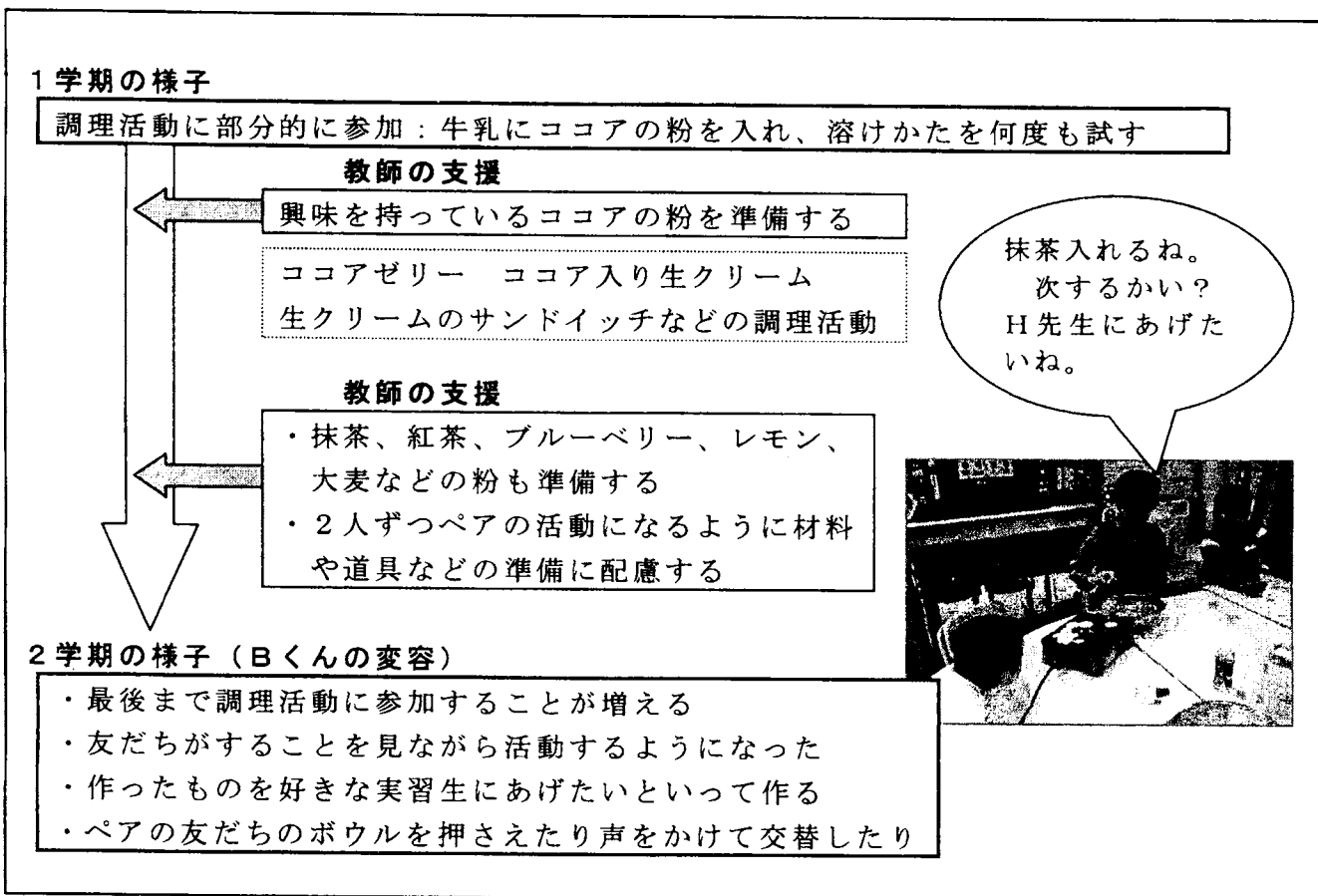


図-II 調理活動で行った支援とBくんの変容

Bくんは、給食の時クラスの友だちが牛乳でココアを作って飲んでいっているのを見て、それまでいっさい口にしなかった給食の牛乳で、自分でココアを作って飲むようになった。そのうち、どれくらいの量を入れたらおいしくなるのかと、溶けきれない量を入れては何度

も試し、しまいには「きたない感じがするから。」と捨ててしまうようになった。そこで、お店のおいしいココアを飲んでみようとして市役所にある喫茶店にでかけた。興味のあるココアの粉から社会に参加する経験を広げることができた。ココアの粉を取り入れたことで調理活動に対しての活動性が上がり、最後まで取り組むことが増えた。また、友だちや周りの人とのかかわりの深まりも見られるようになり、自分が作ったものを大好きな実習生にあげたいと意欲的に作り、ココアが完成するとすぐにあげるといった姿も見られた。

調理活動について以下にまとめた。(図-II参照)

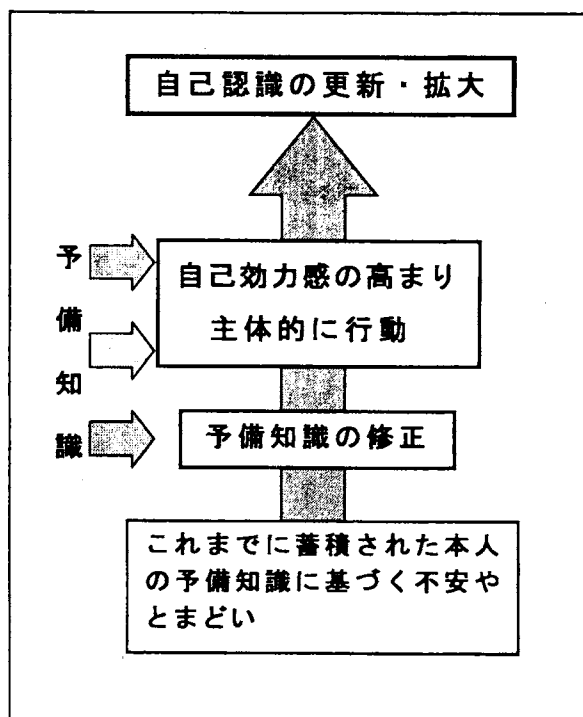
この頃には学校生活に見通しが持てるようになり行動に落ち着きが見られた。また、話し声も大きくなっていった。さらに、個別学習や部集会、全校集会などの活動にも参加できるようになってきた。

Bくんは友だちとかかわりたいという気持ちが強いが、友だちがちょっとタッチしただけでその子の手を強く握り返すなど、力加減が難しいことでトラブルになることが多かった。しかしこの頃からは、トラブルの後に教師と話しながら行動を振り返り、「(自分の)押し方が強かったからそれが嫌で(友だちは)泣いたんやね。強く押したらだめやね。」など、自分で気づき自分の言葉で言うことができるようになった。そして、その気づきを行動にうつすことができるようになってきた。

#### (4) まとめと考察

「何で?」「どうして?」などと問いながら予備知識や納得できる答えを得たことや、学校生活に慣れ見通しを持てるようになってきたことにより、安心感を得られたことが、Bくんの変容に大きく関わっていると思われる。安心感を土台にあくなき探求心をいかに発揮し、「～してもいいの?」「～しなくてもいいよね。」ときかんに聞いてくるようになった。不活発だったBくんが自分のしたいことを見つけて過ごすようになり、したい時にしたいことを充分にすると、それから少しずつ誘われた活動にも参加するようになった。その時私たちは、無理強いせず、参加の様子を見ながら興味のあることや活動性の上がりそうなことを取り入れるようにしてきた。図工では、興味を持ったホットボンドを使った活動の時間を必ず保障すると、他のいろいろな製作活動にも取り組むようになった。「(友だちがしているのと同じ)文字のなぞりをやってみよう。」ということから始めたプリント学習は、今では写真を見て日記を書くことに取り組んでいる。「今日はなんだか嫌だなあ。…でもまあいいか。やるか。」と言って取り組んだこともあった。

Bくんは「～してもいいね」と確認しながら、これまでの予備知識を修正したり、新しい予備知識を取り入れたりしていった。そして主体的に行動し、「できた」と自分で思ったり、教師にほめられたりしながら、少しずつ自信をつけ、自己認識を更新・拡大してきたように思う。学習プリントを綴ったものやアルバムの写真を見てこれまでを振り返ることで、今の自分のよさ



を感じられたようだ。4月からずっと母親と一緒にバスで下校していたが、9月になると、教師とバス停まで行き、一人でバスに乗って帰るようになった。その頃、時計の学習をしていたこともあり、教師の腕時計で時間を確認しながらバスを待つことにした。

その後、友だちが腕時計をしているのを見て、自分も腕時計をしないと伝えた。さっそく家庭に連絡し、腕時計を購入してもらうことになった。腕時計を見ながら、「腕時計は(前の学校では)したらだめやったけど、ここはしていいね。」「一人でバスに乗るから腕時計してもいいね。」ということは何度もうれしそうに言っていた。そして10月、「(一人下校)できる気がするからやらせて!」と言い、その翌日から学校から自宅まで一人で下校できるようになった。予備知識を取り入れ、経験を積み重ねながら自己認識を更新・拡大できたことが、一人で下校することに結びついたと言えるであろう。

友だちとのかかわりにおいても、トラブルの後、教師と一緒にBくんの行動を振り返り、確認行為を通して、人とのかかわる上での手段の整理をしたり、知識を修正したりして、“こうかかわればいいんだ”と自分で気づけるようになり、自己認識を更新していったと考えられる。

自己認識を更新・拡大させていくことは、“前の僕とはちがう、新しい自分”を見つけながら活動の幅を広げ、友だちをはじめ周りの人とのかかわりを深めていくことにとても重要であったのだと思われる。

#### (5) 今後の方向性

今Bくんは、4月からの中学部での生活への期待や不安を口にすることが増えてきている。今後も、Bくんの主体的な行動を引き出す鍵を握る“問いかけ”に丁寧につき合うことを大切にかかわりたい。そして、新しい道を歩んでいくBくんの背中をちょっと押し、具体的な行動を通して、生活世界に関する知識を得ること、そして自己認識(その生活の中で自分には何ができるかなどの、自分自身に対する知識)を更新・拡大させることを期待して、見守っていきたい。

# ICF整理シート

## 【ICF整理シートを使った話し合い】

対象者: B児 11歳 ♂・女

参加者: 小学部教諭

ICF整理シート作成日: 平成20年9月9日

### 健康状態

- ・自閉症
  - ・環境の変化(転校)による、ストレス・疲れやすい
- 〈変調または病氣〉

### 心身機能・身体構造

〈機能・構造障害〉

(できる活動)

(教師の声かけがあれば)

- ・教室に来る
- ・エプロンを付ける
- ・手洗いをする
- ・食パンを包丁で半分に切る
- ・作ったものを友だちや教師に配る

〈活動制限〉

活動・役割や物の個人への参加 (している活動)

- ・牛乳を計量カップで180cc計る
- ・5種類の中から混ぜたい粉を選ぶ
- ・生クリームとココアや抹茶ミルクの粉を泡立て器で混ぜる

参加～生活・人生場面へのかかわり～

- ・同じクラスのH児が材料を混ぜるときにボウルを押さえる
- ・同じクラスのY児をモデルにして行動

〈参加制約〉

### 環境因子～物的・人的・制度的環境～

(母)

- ・B児の行動について、常に気を配っている
- ・B児と丁寧につきあっている

〈阻害因子〉

### 個人因子～興味、性格、習慣、経験、ライフスタイル、体力、価値観～

- ・Hさん(教育実習生)に志向性を持っている
- ・粉に興味がある(ココア・抹茶ミルク)
- ・容器にこだわる

### 主体・主観～本人の気持ちなど～

〈心の悩み・現状への不満など〉

資料3 ICF整理シート2 (牛乳や粉を使った調理活動について記入)

### 3. 成果と課題

#### (1) 成果

今年度の研究では、具体的な事例を通して、「ICFの理念」を学び「ICFモデル」に当てはめ、子どものニーズを軸においた支援目標を設定し、支援のあり方を探ってきた。研究を進めてきた中で、対象児童の姿から、具体的な成果を得ることができたと考えられる。

#### A児について

##### ◆年度当初の実態

- ・したいことがたくさんあり要求をはっきりと伝えることができるが、自分のイメージがはっきりしており、教師の提案を受け入れることが難しい。

##### ◇教師の支援

- ・教師は徹底して彼のピタゴラ装置作りにつき合い、彼のイメージを受け入れ、協力的にかかわった。

##### ◇児童の変容

- ・A児は教師を信頼し、教師の提案を受け入れようとするようになった。
- ・A児はイメージを他者に伝えることで、より高度な装置をつくることができ、自己肯定感や自信が育ってきた。そして作った装置を他の児童に披露したいという新たな要求を生み、DVD化し、発表することで他の人から賞賛を受けることとなった。
- ・文字が書けないという自分のハードルに対しても、教師や友だちに頼んで書いてもらうことで、自己解決していった。

#### B児について

##### ◆年度当初の実態

- ・地域の小学校の特別支援学級に在籍していたが、不登校気味になり4月より、本校に転入した。転入当初は、教室で一人パソコンをしたり、ねころんで本を読んだり、学校での生活は全般的に活力を欠く状態であった。彼が発した要求は「パラオに行きたい。」ということであった。

##### ◇教師の支援

- ・B児の様子をICF整理シートに書き、生活の状況を広く把握することで行動や言動の原因や背景を推察。受容的なかわりを優先する。
- ・いついかなるときもさかんに行う確認行為に、教師間で共通に理解し協力し合って、Bくんが納得できるように丁寧に応える。
- ・人とのかわりを生じさせ、活動性があるものを学習に取り入れる。

##### ◇児童の変容

- ・自分のペースで行動し、学校生活に慣れ、新しい環境に適応する
- ・教師にさまざまなことを質問し、確認行為を通して、あるいは行動することで新しい知識を得て、「そうか。」と自分なりに納得。自信を持って行動できるようになる。
- ・友だちとのトラブルも教師と対話し、行動を振り返り整理し、「こうすればいいね。」と自分で気づき、行動を修正していくようになった。

いずれのケースにおいても、これまで教師主体で行ってきたニーズアセスメントではなく、「ICFの理念とモデルの活用」には、本人の主体性を反映させたニーズアセスメントが重要な鍵を握ったことが明らかになった。つまり、子どもたちが生活の中で何を求め

ているのか><わたしたちはどんな支援をすべきなのか>ICF 整理シートを使い、今の児童の全体像を広く生活面から把握し、そこからニーズを分析することで、支援の方向性が明確になった。

また、AくんやBくんの具体的な行動を通して、彼らが「生活社会に関する知識」と、「自分自身に関する知識」の双方を拡大していけるように、わたしたちが支援することで、彼らは主体的に行動していったことが明らかになった。ICFモデルが表す「生活機能の主観的次元」について学んだことにより、私たちが子どもを見るときに、心の中をできるだけ理解しようとする姿勢の大切さを改めて認識できた。

さらに、ICFの基本的な考え方を学びながら、教師間で共通の子どもの捉え方ができた。その上で、私たちがAくんやBくんに対して相互理解をすすめて、彼らが問題解決できるように、連帯しながら協力的にかかわることができたことも大きな成果となった。

## (2) 課題

小学部の児童においては、要求表出が未熟な児童が少なくない。したがって、本人の主体性を反映させた支援を行うためには、要求表出の意欲を高めていく働きかけが必要であろう。要求に応じていく大人の姿勢により、児童は安心して要求を表出できる。教師も要求を受け止めることで、さらに児童の要求が高まり要求表出する力も増し、本人の主体性を反映させた支援ができるであろう。

今後は以下の課題に取り組んでいきたい。

- ・ ICFモデルを実態把握、企画、評価に使用する際の表現方法の検討
- ・ 「ニーズを育てる」という観点から、特に要求の読みとりが難しい児童の事例検討
- ・ 学校生活のみならず児童の具体的な生活全般をみて支援すること（支援の連続性、必要に応じた他機関との連携）

## ※ 参考文献

- |       |  |
|-------|--|
| 上田 敏  | 国際生活機能分類 ICF の理解と活用                              |
| 大川 弥生 | 生活機能とはなにか ICF：国際生活機能分類の理解と活用                     |
| 吉川 一義 | 本校 2007 年度研究協議会シンポジウム基調提案<br>「カスタムメイドの生活をデザインする」 |